

## SDNET-300 先見情報No.45

### 震災イノベーションの考察

## 「尊い犠牲が新しい日本を生んだ」

年に一度の大雪災害で人々が翻弄される中、孤立した中央自動車道談合坂サービスエリア (SA) で起きたささやかな出来事は、久々に我々の心に染みだ。

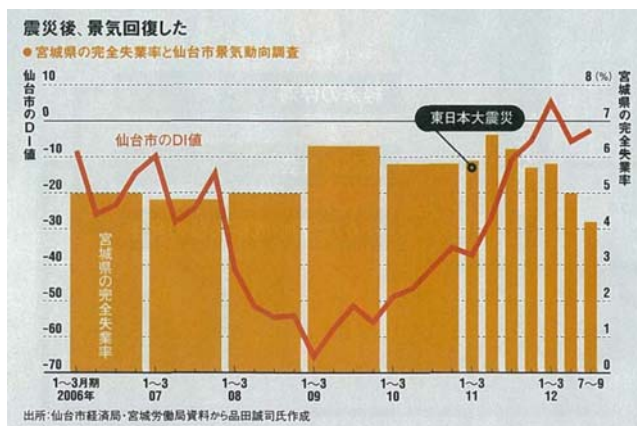
機転を利かせて積み荷のパンを無料で配布したドライバーがいた。SA内の飲食店では飲食物の無料提供をした店員がいた。大手コーヒーチェーンのスタッフは暇を持て余した人々に、テイストリング講座を開いてみせた。

彼らの行動の根底には、東日本大震災後の「助け合いの記憶」があった、と考えるのは飛躍が過ぎるだろうか。「3・11」の後、我々日本人のどこかが、確かに変わったと信じたい。

この一年の自然災害だけを見ても、昨年秋、京都の景勝地に被害を与えた台風、伊豆大島の集落をのみ込んだ土石流など、記憶が蘇る。都市を大きく破壊するような激甚災害も、数十年に一度のペースで繰り返している。

その都度、人々は困窮し、重荷を背負う。

しかしながら、必ず日本は立ち上がってきた。そして災害をきっかけとして、多くのイノベーターや企業が生まれ、新たな知恵が育まれ、経済発展へと導かれた。



わずか三年前の東日本大震災でさえ、少しずつ効果が表れている。景気低迷にあえぐ地方都市に若い人が集結し、そこで起業を志す人が増えた。商業登記ベースの開業率で見ると震災前の仙台は3%に満たず、全国平均を大きく下回っていたが、2011年度は1ポイントも上昇し4%

になった。

仙台市の景気動向を見ると、震災が起きる2年前をどん底に景気は大きく低迷を続けていた。だが、震災後1年でDI値はプラスへと転じた。

同時に宮城県の完全失業率も低下傾向にある。一方でこれらは、破壊されたインフラの復旧需要による、一時的な景気回復との見方もある。

災害後にイノベーションが起きるメカニズムだ。大災害が起きると、瞬間的には物質的な破壊が起きるが、同時に、非効率的な組織や、成長を阻んでいた制度・ネットワークも壊される。様々な社会基盤の新陳代謝を経て、新しい価値観が生まれてゆく。20世紀のオーストリアの経済学者ヨーゼフ・シュンペーターはこれを、「創造的破壊」と言った。米スタンフォード大学の星岳雄教授は、「大きな災害の後には新しい制度ができて、成長を手助けする場合もある。今回は自然災害に加え、原発事故という人災も同時に起きた稀有なケース。フクシマではイノベーションが起きにくいという人もいるが、政府や自治体、電力会社への不信感が、結果的に自分たちで何とかしなければいけないという機運の高まりへと転じることで、イノベーションの起因になる可能性がある」と指摘する。

地球規模での自然の営みの中で災害と創造は、綿々と繰り返されてきた。その極めて精巧なメカニズムの中で、特集で取り上げた7人の登場は、「自然の摂理」とさえ言える。そして今はまだ、一人ひとりの力は小さいのかもしれない。

しかし、「3・11」後、市井の個々人ですら、「被災地のために、行動を起こしたい」「何か社会の役に立てることはないか」と考えたはずだ。会社を辞めて現地に入った人も少なからずいた。

ベンチャー支援に関わるMAKOTOの竹井智宏氏が、「自分のすぐそこに死があるということを目の当たりにし、世の無常、人生の有限に多くの人が気づいた。その結果、与えられた時間を有効に使おう、リスクを選んででもやるべきことをやろう、という意識が芽生えた」と語ったことが印象的だった。

この「公益観念の掘り起こし」こそ、3・11がもたらした大きな果実だったのではないか。社会全体がイノベーションを起こしたと言える。

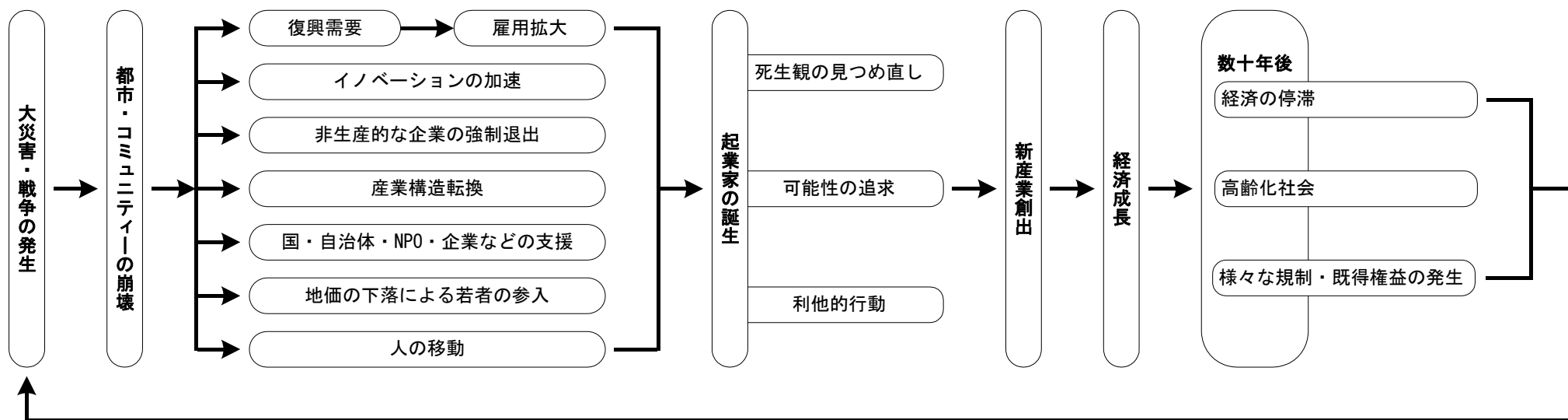
ただ4年目以降、震災の記憶の風化は避けられない。被災地への関心を引き付ける象徴としてのリーダーやイノベーターを支える、新たな仕組みが必要だ。特に、既得権を壊し、規制緩和をより一層推し進める必要がある。年長者は若者に活躍の場を譲り、経験と知恵を授ける脇役に回ることが大切だ。

「時間」を戻してはいけない。悲しい震災の記憶を心に刻みつつ、前よりももっと魅力ある東北、強い東北へと踏み出したい。そうでなければ、1万8520人の犠牲者の魂は救われない。

自然災害に対する克服の歴史、数多（あまた）の犠牲を土台にして、我々は今を生かされている。

出典：「日経ビジネス」2014年3月10日号

### ■悲劇の後に、新しい社会が創られる



※出所：品田誠司氏の研究報告や複数の専門家への取材を基に日経ビジネス作成